

茶の本

— 未完成の美とは —

外国語学部 国際文化交流学科 4年

松本 満美子

はじめに

日本を代表する文化として、茶の湯は必ずと言っていいほど頻繁に挙げられる。「茶の湯は日本が誇る素晴らしい文化だ」と言われるが、果たして茶の湯が持つ役割の真の理解は浸透しているのだろうか。近代美術の発展に大きな功績を残した人物である岡倉天心は、1906年に出版された『茶の本』⁽¹⁾にて、茶の湯の持つ宗教性、また、それに基づく日本の精神性について書き綴った。以降『茶の本』は、東洋の精神世界を説明する教本として世界中の人々に読まれてきた。

さて、本書の冒頭で天心は、

茶道の本質は「不完全なもの」を崇拝することにある。いわゆる人生というこの度し難いものの中に、何か可能なものを成就しようとするやさしい試みなのである。(p.7)

と述べている。茶道の本質が簡潔に説明されている一文であり、この「不完全なものを崇拝すること」は天心が一貫して繰り返す言葉だ。天心が意味する「不完全なものを崇拝すること」とは何なのか。本論文ではこの謎を、まず茶の湯と道教との関わりについて探り、道教と絡めながら茶道の美を紐解き、実践に繋げながら考察していくことにする。

1. 未完成の美

天心の言う「不完全なものを崇拝すること」とは一言でいうと、「各個人が想像力を持って道^{ミチ}を発見すること」である。それでは天心による記述から、以下考察していく。

1-1 道教と茶道

まず道とは何か、天心は次のように述べている。

それ(道)は宇宙変遷の精神—即ち新しい形を生み出そうとして元に戻る永遠の成長である。…道とは大推移ともいうべきか。主観的には宇宙の様式、その絶対者は相対物であるともいえよう。(p.28)

道とは、中国の最大宗教の一つである道教⁽²⁾の中心概念である。道家の思想の基礎を築いたとされる老子の著、『老子』においても道の重役性が述べられている。本書の天心の言葉から、道教またその道のもつ性質について解説していきたい。

天心はここで、道教の道は相対的な事象であふれるこの世を包括する絶対的な方式であると説く。例えば、四季の例をもって道を説明することができる。春、夏、秋、冬はそれぞれ相対的な現象である。しかし、春が終わると夏が訪れ、夏が終わると秋が、秋が終わると冬が来、そしてまた春に戻る、この変わらぬ方式が道だということだ。

道教の教えに倣うと、人々は常に慈愛に満ち節約を心掛け、謙虚な姿勢でいることで道とともに生きることが可能になるという。個人主義的思想である点において、儒教やその後継者と異なる。この違いは、南方中国の個人的主義、北方中国の共同主義的思想という形で分類できると天心は述べている。道教の性質は自己主張をやめ、全体の和をもって道とともに生きることだ。さらに道教の最終目的は、自分自身が道になることであると天心は述べる。

このように道教において道とは、一見相対的な事象を包括し、生き方を示す重要な存在であるといえる。次に、道教と茶道の繋がりについてみていこう。「詩人陸羽⁽³⁾は、茶の湯に森羅万象を支配しているものと同一の調和と秩序を認めた。」(p.20)と述べている

ことから、茶の湯には道教の思想が深く根付いていることが窺える。森羅万象、つまり、道教における一切を包括する絶対的な方式である道と、茶の湯の精神に同質な何かを見出したということである。

僧侶達は菩提達磨の前に集って、ただ一個の椀から聖餐のように儀式張って茶を飲んだ。結局十五世紀になって、日本の茶の湯に発展したのが、まさにこの禅の儀式だったのである。(p.24)

天心は、このように茶の湯の始まりが、禅の儀式の一環であったと述べている。また、「茶道一切の理想は、人生の些事に偉大さを認めるという禅の概念からきている。」(p.38)という記述もある。天心が言うように、道教から派生した禅⁽⁴⁾、その儀式が茶の湯の起源であるとする、茶の湯の根底には道教の思想が存在するといえる。ここでもまた、天心は道教そして禅と茶道の結びつきについて強調しているのである。

では次に、茶の湯と道教の共通点を精神的な観点からみていこう。先にも述べた道教と茶の湯を同一視できる「何か」とは何なのか。

既に述べたように、茶の湯の発端が、一つの茶碗から僧たちが茶を飲む禅の儀式であったと天心はしている。本書では、茶の湯と道教・禅との精神的関係性が掘り下げられているのに対して、なぜ禅の先人たちが儀式の一環として茶を飲む行為を始めたのか、その理由は詳しく述べられていない。しかし天心による道の説明を踏まえて考察すると、ここでの「一つの椀」が道教における「絶対者」つまり「道」を、「次々に茶を飲む禅僧達」が「相対物」の役割を担っているといえる。一杯の茶が個別に存在する僧たちを包括し、秩序あるものたらしめていると考えられるのだ。つまり、禅の儀式の一環として始まった茶の湯は、一杯の茶碗と道の性質を同一視したことが理由なのではないだろうか。

このようにして天心は、茶の湯の持つ宗教的意味合いを強く主張した。茶道は道教の思想から生まれ

たものであり、単なる娯楽のための遊戯ではなく、その本質は道教の道と同じく人の生き方を教示する哲学なのだと言った。さらには日本においてその精神性が完成されたことも強調している⁽⁵⁾。

1-2 未完成の美

次にいよいよ本題である未完成の美とは何か、その真髄に迫っていく。道が道教において極めて重要な存在であることは既に述べた。また、茶道が道と同一の思想精神を兼ね備えていることにも触れた。美的思想においても、道と茶道の両者は非常に似た性質を持っているといえる。

1-2-1 道教における美

では最初に、道教における美についてみていこう。道教での美とは、自分自身で道を想像することで発見するその行為、過程であると天心は言う。そのことが読み取れるのは、「道教は俗世をありのままに受け入れ、儒教徒や仏教徒と異なって、悲しみと悩みのこの浮世の中に美を発見しようと努める。」(p.32)という記述からだ。道教において、常に移り変わる未完成なこの世の現象を包括する道を見つけ出すことが美なのである。例えば、春の満開の桜の木も、時期が過ぎればいずれは散る。美しい花を見ることができなくなることを人々は悲しむかもしれない。しかしそれも自然の方式、つまり道であるのだ。蕾から花びらが生まれ、やがて散り枯れる。それは留まることのない自然のサイクルであり、変わらぬ方式である。このような物事の本質である道を見つけることが美であると述べている。

1-2-2 茶の湯における美

次に、茶の湯における美について述べている文をみていく。茶の湯の美も道教と同様に、一切を包括する道を感じるその行為に重点が置かれている。

完全そのものよりも、完全を求める過程に重点を置いた。真の美は不完全なものを精神的に完成した人によってのみ発見されたとした。人生と芸術の力強さは発達の可能性に存していた。茶室においては、客は銘々自分に関して全効果を想像の中で完成するよう任されている。(p.49)

この文において天心は、茶の湯の美には、道教の美と同じく未完成を崇拝する性質があると述べている。これは、本書の冒頭でも述べられていることであり、また本論文のテーマだ。これを例えるなら、茶室の床の間に飾るには満開の桜の花よりも、蕾の段階の桜がより美しいということだ。各自が蕾から満開の花を想像する過程こそが茶の湯の美である。つまり、道を発見することこそ美であるとする道教の主張と併せて考察すると、未完成とは即ち変化の途中であるといえる。変化は永遠の成長である。成長である変化を包括し、秩序あるものたらしめている方式こそが道である。

また、「それが「不完全」の崇拝に捧げられ、わざわざ何物かを未完成のままに残しておいて、想像力にその完成をまかせる限り、それは「数寄屋」なのである。」(p.39)と茶室の章で述べ、「数寄屋」という茶室の呼び方について説明している。ここから、道教と同じく、未完成さの重要性が強調されていることがわかる。未完成なものから完成を想像する。この活動は各個人の中で行われることであるから、完成の形は千差万別であるともいえる。完成形に決まりはないと天心は述べている。

道教が「道を見つけ出す」としているのに対し、茶道は「道を想像することでを見つけ出す」とする点において、両者の違いが見られるが、抽象的な表現に留まる道教の美的思想を天心が独自に解釈した結果、「想像する」というより具体的かつ実践的な発想に至ったのではないかと考える。しかし、「各個人が自分自身で真理（道）を見つけ出す過程こそが美しい」とされる点から、道教と茶の湯の美は本質的に同一であるといえる。

1-2-3 成長と停滞

茶道における美が、道教のそれと同様に未完成なものから自己の中で完成させることであるとわかったところで、次に、茶道の美に深く関係する成長と停滞について掘り下げていく。

道教や茶道において天心は、

道教徒は社会の法律と道德律を罵倒した。…彼らにとってみれば、善も悪も相対的な言葉にすぎなかったからである。…「固定」と「不変」は成長の停止を意味する言葉にすぎない。(p.30)

とし、儒学の規律を道教が非難した点を挙げ、道教は変化し続けることが成長につながることを重要視すると述べている。善悪は他者から決められるものではなく、善も悪もそれ以外も全てが道であるとするのが道教の教えなのだろう。「～は善い行いだ」や「～は悪しき行いだ」といったように定義されることは、道教においては避けられる。普遍性や不変性は停滞を意味し、変化や推移は成長を意味するという。

また、「古人を愛することは一層深く、彼らを模倣することはより少なくありたいものである。」(p.47)と述べ、古人の創造物を真似することを避け、それら古人の思想を自らの中に取り込み変化発展させていくことが最も理想的だとしている⁽⁶⁾。単なる模倣は反復を表し、反復はすなわち停滞を意味する。停滞と成長・変化は常に対局に存在するのだ。

1-2-4 虚

次に、天心が空間の例をもって美を説明している箇所に触れていこうと思う。これまでに、茶室が道において重要な役割を担っていることは述べてきた。ここでは茶室の持つ可能性についてより詳しく読み解いていく。

虚によってのみ本質が存在すると主張した。…虚はすべてを含むが故に万能である。虚においてのみ運動が可能となる。己を無にして人に自由に立ち入らせることのできる者は、あらゆる立場を左右し得る人となるであろう。(p.33)

ここから、「虚」が持つ積極的な「動」の働き、想像を許容する性質が虚にはあると述べられているといえる。先述したように、活発な移り変わりや成長が、道教や茶の湯の美に深く関係している。

茶室に置き換えてみると、部屋を物理的に構成する壁や屋根に重要性はなく、作られた空虚そのものに本質が存在するということである。また、「虚はすべてを含むが故」とあるように、虚は全てを包括する道と同一の特質があるといえる。変化という運動を包括する道と虚、虚であればあるほど道に近づくことが可能になる。ここから、必要最低限の品以外を排除した、空虚に近い茶室で、美を発見することの重要性が主張される理由がみえてくる⁽⁷⁾。

茶の湯の虚とはすなわち美であるとしばしば考えられる傾向にある。しかし天心は、虚とは道を見極めることを阻害することのない空間であり、道を見ることが自体が美であると主張しているのではないだろうか。

また天心はこの後に次のようにも述べている。

何かを言わずにおくところ、観察者はその思想を完成する機会を与えられることになり、かくして大傑作はいやおうなしに人の心を惹きつけ、終には自分がその作品の一部になるように思われるものである。一種の虚が観察者を誘い、その美的情緒を十二分に満たせとばかりに待っているのである。(p.33)

先述と同様に、虚によって道を想像することが可能であると述べている。なぜならそこは、虚によって流動性が活性化された空間であるからだ。ある芸術品(形在るものに限らず)を目の前にしたとき、観察者は一種の虚を感じる⁽⁸⁾。そして虚を自ら埋めることで自身の中で完成させるとのことだ。さらに、その虚は芸術の創造者が意図的に作り出したものであるといえる。また、少し話は逸れるが、「終には自分がその作品の一部になるように思われる」という部分から、ここでまたしても道教と茶の湯の共通性が浮かび上がってくる。道教が最終目標としているところが、自分自身が道になることだということは述

べたが、茶の湯において自分自身が美になることを究極の美としているのだとすると、両者の性質は等しいといえる。

2.美の実践(茶室)

さてここまで、めいめいが自身のなかで想像によってあらゆる事柄を完成に導くことこそが美であるという天心の考えを繰り返し強調してきた。では、「各自が想像により見つけ出す美」とは一体何なのか。茶会に招かれた客人や茶を点てる亭主として、はたして我々は茶室という空間において、具体的に何を想像することにより真の美を発見することができるのだろうか。残念ながら、本書の中で天心がこのことについて例をもって具体的に述べている箇所は見当たらない。どれも的確に本質を捉えているが、抽象的な説明に留まっている。本章では、これまで引用してきた文から、天心の伝えようとする実践的な美の発見について考察していこうと思う。

私たちが茶室において実践すべきことは、移り変わる環境の中でそれぞれが抱く「最高のもの」を想像することだ。ここでも桜の花を例に用いることにする。人それぞれ、「最高の桜」の形は異なる。成長の途中にある蕾から、春全体を感じるからこそが美であるといえる。つまり、今この時の自然世界を茶室で感じるからこそ、私たちが茶室において実践すべきことであると考えられる。道教において、その存在こそが世の真理であるとされる道。道はこの世で起こる事象すべてを包括する方式であるのだから、「道とは～のことである」と一言に定義を確定することは困難であり、定義することで道教の掲げる思想を根底から否定することにもなる。しかし、本書を読んだ後で改めて考察すると、自然の事象こそが最も重要な道であるのではないだろうか。自然の「動」という道を感じるからこそ、茶室において天心が行うべきとしたことなのではないだろうか。

変化の真ただ中にある蕾から、常に移り変わるこの世を感じる。蕾を前にして季節の変化、寒さの

厳しい冬から暖かく穏やかな春へと移行する今その瞬間を、茶室という質素な空間のなかで感じるのが美であるのだ。蕾の他にも、季節に準じた茶道具や手前の数々、炭のはじける音の微々たる変化、障子から透けてさす太陽の光、庭から聞こえるのは鳥の鳴き声かはたまたカエルの鳴き声か、梅雨時は雨が降るかもしれない。それは、常に穏やかで、平和なものとして現れるわけではない。時に厳しさや恐怖を与えてくるだろう。しかし、それらすべてが私たちを取り巻く自然である。

天心も本書でこのように述べている。

茶釜は美しい音をたてて鳴る。特殊な快音を出すように茶釜の底に鉄片が並べられてあるから、それを聞けば雲に包まれた滝の響きか、岩に砕ける遠海の波の音か、竹林を払う風雨か、それともどこか遠くの丘の上の松籟かとも思われる。(p.44)

ここで天心は、茶道具の持つ可能性について述べている。そしてまたしても、それらディテールたちは、茶室にいる人々の想像を大自然へと導いている。さらに、想像は身近な自然にとどまらず、遙か遠くのあるいは目にしたことさえない風景へと広がっていく。

このような天心の記述は、日本の自然観の特異性を主張していると考えられる。茶道の思想の根底には、道教と禅の精神が深く根付いていると天心は述べている。天心はこうした道教・禅と日本の自然観の間に、強い親和性を感じたのではないだろうか。

日本の自然観は、とりわけ日本人の思想の根幹を築いているといえる古代神道的自然観において、自然は豊穡と災いの両者を人々にもたらすものとして認識されている。自然の万物に神がそれぞれ宿り、それらを祀ることで恵を得ようとする。これらの祭祀は形骸化されたものを含め、今日でも多く残り親しまれている。

一方西洋の自然観は、世界は神が作り出したものであり、その内に神秘性は全くないとしている。旧約聖書には、

我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。(旧約聖書、p.2)

とある。動物を含む自然は常に脅威の対象であり、人間が支配すべきものにすぎない。このような自然観は、西洋におけるシンメトリーを強調した庭園にも如実に現れている。

天心はこのような相違点を比較し、日本人の自然観を茶道から見出し、主張したのではないだろうか。東洋世界における自然に対する思想精神を、西洋世界に説明することを試みたと考えられる。

茶室ほど心を研ぎ澄まし、自然を肌で感じることでできる空間はあるのだろうか。人々は茶室を訪れることで、日々の慌ただしい暮らしから少し離れ、日常の中の非日常に身を置く。静けさに包まれながら、自然の変化を体験し想像を膨らませることで、忘れかけていた壮大な力を感じることができる。

3. 美の実践(処世術)

さて、茶室における美の実践⁽⁹⁾について具体的にわかったところで、最後に、処世術としての茶道の美の実践に焦点を当てることにする。

天心は、茶人宗匠の章で、茶人達が茶の湯を処世術として、世の中に普及させていったと述べている⁽¹⁰⁾。もともと処世術と呼ばれていた道教の精神⁽¹¹⁾が茶の湯に受け継がれ、茶室の中での美が作り出される。その後、茶道の美が茶室を飛び出し、もとの処世術として活かされるということだ。日常の些細な活動であっても、その人物の人となりまたはその思想が現れるとする禅の思想⁽¹²⁾を受け継いだことから、茶道を処世術として生活に取り入れることとの重要性がうかがえる。むしろ、「反映させる」というよりも「自然と表れてくる」という言い方が適切かもしれない。茶の湯によって培ったその精神性により、その人が形成され、日常にもそれが自然と滲み出る。また、

日常生活で自身を律することで、自らの思想を美に近づけていく。処世術として活用する二つの方法は、相互に作用していると考えられる。ここで天心が主張する茶の湯の処世術の在り方は、一見、茶道というよりも、道教の処世術という方が適しているように思われる。しかし、茶道なくしては広まらずにいたかもしれないこの処世術が、茶道を介して生き続け、また変化し続けたのだから、茶道の処世術といえるのではないだろうか。

このように、茶室内にとどまらず、人生における処世術としての美が茶の湯には存在する。茶の湯から飛び出し、その美が日常生活に活かされることこそ、天心の伝える茶の湯の美の最終目的、すなわちその人自身が芸術となることだといえるのではないだろうか。

ここで少し、「自身が美になる」について整理したいと思う。これには二つのプロセスがある。虚の役割について説明した際、「ある思想に存在する一種の虚に、個人が入り込み完成させることで、自分自身が美になることができる」と述べた。また、先の処世術の項では「日常生活に茶道の精神を反映させることで自身が美になる」と述べた。最終的に「美になる」ことが目的であることに変わりはないが、明らかに内容が異なることも事実だ。天心がどちらを真の茶道の目標として認識していたのかは定かではないが、両者が共存していると考えていたともいえる。一方は観察者における究極の美、他方は美の表現者の実践すべき美であると考えていたのではないだろうか。

このように、茶道の美は大きく分けて二種類存在することが述べられていると推測される。一つは、茶をたてる時まさにその空間、茶室で自らが想像力を働かせ、常に移り変わる道を発見するもの。もう一つは、それらが日常生活へ反映され、さらに進化することで、無常そのものから喜びや楽しみといった積極的な感情を見つけ出すことだ。後者は前者から派生したと考えられる。似て非なるものだが、どちらも運動そのものを重要視する点、また、留まることのない一見無関係な事象の方式を発見する点において、共通性を感じることができる。

ここまで天心が説く茶の湯の美の発見を具体的に考察してみた。その実践の根底にはやはり道教・禅が存在し、それと同時に、日本の自然観が関係しているのではないだろうか。

おわりに

これまで様々な例を用いてみてきたように、天心の定義する茶道における美の真髄は、各自が圧倒的に身近な存在である自然に対して改めて向かい合い、五感を研ぎ澄ませてその変化を意識することであると結論付けられる。茶室という場は非日常でありながらも完全に日常と切り離された空間ではなく、むしろ日々の暮らしにより密着している。さらには、日常の中で人々がしばしば忘れがちな自然の偉大さや重要さに気が付かされる場でもあることが示される。

そして茶道の本質は道教、禅の思想を多いに継承していることも繰り返されてきた。道教や禅についての知識を深めることも、天心の定義する茶の湯をより詳しく知ることに繋がるだろう。

また、自然を感じる茶道を通し、自らの生活を見直すことが目的となされているとも推測できた。近代化に伴った様々な技術の発展により、私たちの暮らしは以前よりもますます便利になってきた。昨今注目を集めるめまぐるしいAIの発達は、近い将来さらに日々の活動の利便化を進めていくだろう。しかし、それと反比例するかのよう、私たちの生活は尚もって自然から遠ざかっている。現代人は、あまりにも多くの物で溢れ返った日々の中で、便利化し余裕が生まれることもなく、むしろ以前に増して時間に追われながら過ごす。それは大切にすべきものも見失っているからだ。天心は本文で次のように言っている。

我々が人生と呼んでいる、愚かな苦勞に満ちたこの騒がしい海の上の生活を、適当に律していく骨を知らない人々は、外観は幸福で満足しているように努めながらも、その甲斐もなく非常に悲惨な状況にいる。(p.74)

まさに現在の私たちの現状を、端的に述べている文だといえるのではないだろうか。

今、天心のいう茶道とその精神をもって、もう一度自身の生活を見つめなおす必要があるのではないだろうか。人々は心を静めて茶室という簡素な空間に身を投じることで、各自が道を感じることができる。生き方を考える機会として、茶の湯は絶好の手段であるといえる。茶の湯は単なる遊芸ではなく、私たちが生きる上で大切にすべきことを思い出させてくれる場としてある。これこそが、天心の伝える美の想像と発見の実践なのではないだろうか。

天心はかつて、アジアの文化とその精神性を、西洋文化圏の人々に発信することを目的として本書を書いた。いまや日本文化の中で暮らし、さらには「茶道は日本文化を代表する」と考えている人でさえ、茶の湯の精神性、とりわけそれが示す美の正体を知らずにいるかもしれない。自身の生活と文化の持つ哲理性についてももう一度考えるべきであると天心は伝える。『茶の本』は現在の日本で生きる私たちへのメッセージなのかもしれない。

参考文献

- 伊東俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社1995年8月25日
- 上原雅文編著『自然・人間・神々—時代と地域の交差する場』御茶の水書房2019年3月25日
- 岡倉天心・著、桜庭信之・斉藤美州・富原芳彰・岡倉古志郎・訳『茶の本/日本の目覚め/東洋の理想 岡倉天心コレクション』筑摩書房2012年6月10日
- 岡倉天心・著、浅野晃・訳『茶の本 The Book of Tea』講談社2017年1月18日
- 新共同訳『聖書』日本聖書協会1987年1月1日
- 西谷啓治『講座禅 第二巻 禅の実践』筑摩書房昭和12年9月25日
- 蜂屋邦夫『老子』岩波書店2019年5月7日
- 福永光司『道教と日本文化』人文書院1985年10月20日

注釈

1. 『茶の本』からの引用は、参考文献に挙げた『茶の本』筑摩書房に拠る。以下引用文の後に（ ）でページ数のみを記した。
2. 本論文で述べる道教は全て老子思想を指す。
3. 陸羽は『茶経』などを著作した唐代の文筆家。
4. 禪はインド人仏教僧の菩提達磨が中国に渡り、確立した大乘仏教の一派である。「禪は道教と同じく相対性の崇拝である」(p.36)というように、禪は道教の思想を大いに受け継いでおり、また、その性質も似ている。また本文で天心も、「禪は道教の教えを強調していることがわかるであろう。」(p.34)と述べている。
5. 13世紀頃絶大な勢力をあげていたモンゴル部族の領土侵略により、中国は宋代まで発展させた哲学的な茶の湯の形態を消失することになる。一方日本は、「禪の精神を現実生活の中に導入しようと試みた。」(p.42)とあるように、部族の侵入を阻止し(文永の役・公安の役)、茶文化を中国から輸入した後も、以前の宗教的意味合いを持つ茶の湯を受け継ぎ、茶道を精神的な完成形へと導くことができた天心は述べる。
6. これについて天心は、日本古来の神道の例を用い、「家主の死は家の死」という思想が古くから日本に存在していると述べ、道教的精神との結びつきについても主張している。亡くなった茶人の生活や思想によって構成される茶室を、そのまま受け継ぐことは不可能であると述べている。
7. より具体的に、茶室を用いて虚の持つ性質について説明されている引用文として、「茶室はある美的感情をしばし満足させるために置かれる物を除いては、全く空虚である。その時々にある特別な美術品が持込まれるが、その他の物がすべて主題の美しさを高めるために選択され配置される。人は様々の音楽を同時に聞くことができない。美しいものを本当に理解することは、ある中心主題に集中することによってのみ可能となるからである。」(p.47～48)がある。虚は道を発見することにおいて肝要な役割を担っている故に、それを阻害するような余計な物は置いてはならないと述べている。
8. 道の動きを活性化させる許容性を持つ虚が邪魔されることについて危惧している文が次の通りである。「事物に内面的本性との直接的交渉を目的とし、その外面的附属物は真理の認識をくまらず障害にすぎないものとみなした。」(p.37)「芸術鑑賞に必要な心の同情的交通は互譲の精神に基づかねばならない。」(p.53)ここでは、芸術は自分自身との精神的な交流によってのみ作り出されるものだとして主張している。「精神的な交流」とは、想像のプロセスを指す。また別訳では、「そうしてそれら(ことばや鮮やかな色彩の絵画)事物の外面的属性を以て、真理の明晰な認得の為の邪魔物に過ぎないとみなしたのであった。」(茶の本 The Book of Tea, p.100)と述べている。芸術と自身との心の交流における障害物を、より具体的な例を用いて説明している。変化することのない言葉に固執することで、常に変化し得るものを妨げ、鮮やかな色つまり表面だけのものに気を取られ、内なる道の動きをみることが不可能になる。虚の持つ万能性とその中で想像を働かせることの重要性を、道を妨害する事物を挙げることで裏付けている。
9. 茶室における美の実践はこの他に、一つ一つの小さな動作でさえも丁寧に行うことや茶室に置く物品たちを、様々な観点からみて反復することを避けることなどが挙げられる。これらについては、本書において天心が禪と茶道との関係について述べていることや、「茶室の中では反復を恐れる気持が絶えず存在している。部屋を飾る様々の物品は、色と意匠が重複しないように選択されなければならない。」(p.49)との文から比較的具体的な実践に基づいた記述があるため、今回は着目しないことにする。
10. 「芸術を真に理解することは、芸術から強い影響力を生み出す人にとってのみ可能である。そこで彼らは茶室の中で得た優雅な高い標準によって日々の生活を律しようと努めた。」(p.72)
11. 「シナの歴史家は道教のことを「処世術」と呼んでいた。というのは道教は現在を一我々自身を扱うからである。神が出会うところ、そして昨日と明日が分かれるところは我々の中なのである。」(p.32)
12. 「禪において日常的な労働作業は全て「作務」と呼ばれており、単なる労働ではなく修行としてみなされている。」(講座 禪 第二巻 禪の実践、p.121)「禪は生活そのものである」(講座 禪 第二巻 禪の実践、p.63)